OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜待つ＞時間 ー補論 ： アクションリサーチの ＜時間 ＞ー
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2019, 2(2), p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈待つ〉時間
ー補論：アクションリサーチの〈時間〉ー

Pure and perfect waiting
ー Theoretical analysis of 'time' in action research ー

矢守克也[1]
Katsuya YAMORI

要約

本論文は、すでに発表した拙稿「アクションリサーチの〈時間〉」（矢守,2018）の補論となる論考である。具体的には、鷲田（2006）による〈待つ〉ことに関する示唆的な著作を手がかりに、時間、特に、〈インストゥルメンタル〉な時間と〈コンサマトリー〉な時間の関係性に関して、矢守（2018）で十分論じきれなかった側面について考察したものである。〈待つ〉の根底には、〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉との間の逆説的な機能連関がある。しかも、その連関は、矢守（2018）が注目した〈インストゥルメンタル〉の拡大・膨張の徹底によって、現在を高揚化・絶対化させることで〈コンサマトリー〉へと転回させる機能連関ではない。それとは正反対に、〈インストゥルメンタル〉の縮小・退縮の徹底によって、現在を冷却化・静謐化させることで〈コンサマトリー〉へと転回させる機能連関である。〈待つ〉は、何らかの目標状態の「徴候」に過敏に反応する態度（アンテ・フェストゥム）のもと、〈インストゥルメンタル〉な意味で待つことではない。また、その目標状態を計画として予め現在の中に取り込もうとする態度（ポスト・フェストゥム）のもと、〈インストゥルメンタル〉な意味で待つことでもない。〈待つ〉は、〈コンサマトリー〉な時間のなかで現在を「時を細かく刻んで」静かに生きながら何かを待つことである。

Abstract

This paper is a supplemental argument for the article, "Theoretical analysis of 'time' in action research" (Yamori, 2018). I discussed, in this paper, the relationship between two totally contradictory dimensions of time, "instrumental" and "consummatory," based on a philosophical work about "pure and perfect waiting" by Washida (2006). "Pure and perfect waiting" is characterized by a paradoxical interdependence between the two different dimensions of time. This paradoxical interdependence is not caused by both "instrumental" and "consummatory" dimensions magnifying or reinforcing each other, highlighted in Yamori (2018), but, on the contrary, by both dimensions negating or reducing each other. "Pure and perfect waiting" is neither "waiting" for a specific target with over-sensitive attitudes under temporal mode of "uncertainty" or "ante-festum" within an "instrumental" dimension, nor "waiting" for a specific target with over-prepared attitudes to predict and prepare for all under temporal mode of "completeness" or "post-festum" within an "instrumental" dimension. It is "waiting" for something undefined, without the feeling of waiting, in a steady and calm everyday lives within a "consummatory" dimension of time.

キーワード: 時間、インストゥルメンタル、コンサマトリー、アンテ・フェストゥム、ポスト・フェストゥム
Keywords: time, instrumental, consummatory, ante-festum, post-festum

１．〈待つ〉とは何か

1.1〈待つ〉とは何でないのか

本論文は、すでに発表した拙稿「アクションリサーチの〈時間〉」（矢守, 2018）の補論となる論考である。具体的には、鷲田（2006）による〈待つ〉ことに関する示唆的な著作を手がかりに、時間、特に、〈インストゥルメンタル〉な時間と〈コンサマトリー〉な時間の関係性に関して、矢守（2018）で十分論じきれなかった側面について考察したものである。鷲田（2006）による〈待つ〉ことに関する考察は時間論として読むことができ、しかも、〈待つ〉を特徴づける時間は、上述した〈インストゥルメンタル〉、〈コンサマトリー〉両者の関係性について非常に重要な示唆を含んでいる。

[*1] 京都大学防災研究所 教授・博士（人間科学）
Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

ただし、鷲田（2006）は、もともと、ある出版社の一般読者向けの広報誌に連載されたエッセイを集成したものである。そのため、大変読みやすい反面、著者の主張の根幹をなすロジックを適確につかみとり、また、その背後にある時間に関する学術的研究の蓄積へも注意を向けないと、エッセイ固有の詩的な記述や一話完結のスタイルに災いされて、表層的かつ断片的な理解に流れてしまうリスクも秘めている。たとえば、同書は、「忙しい時代だからこそ、急かずにスローにやりましょう」とか、「早くできない人もいるのだから、配慮して待ってあげましょう」とか、こうしたわかりやすいことを主張しているわけではない。

鷲田の言う〈待つ〉が何であるのかを理解するためには、それが何でないのかを理解するのが早道である。つまり、一見すると、文字通り待っているようであり、待つということの典型例のようでありながら、実は〈待つ〉になっていない待つが世間には多数存在する。そのような待つの偽物、あるいは、待つの破綻を理解すれば、真の〈待つ〉が何であるかは自ずと判然としてくる。筆者の考えでは、このとき、木村（1982）および真木（1971）を踏まえた「アクションリサーチの〈時間〉」論（矢守, 2018）を考察の補助線にするのが有益である。逆も真なりで、〈待つ〉とは何かについて、あるいは〈待つ〉とは何でないかについて考えることを通して、「アクションリサーチの〈時間〉」に関する議論をさらに前に進めることができる。

1.2〈時間〉論の復習

矢守（2018）によれば、時間は、2つの系列、すなわち、人間的な実践の外的な枠組みとしての客観的な「時間」と、主体的な〈時間〉とに区別される。客観的な「時間」とは時計によって計測される物理的な時間のことである。他方、主体的な〈時間〉とは、たとえば、もう済んでしまった試験についてまだあれこれ考えているなど、「今はもう」、あるいは「今はまだ」といった、自分自身の営みにおける主体的な構えとともにある時間のことである。

〈時間〉は、基本的に、既定性優位（ポスト・フェストゥム）と未定性優位（アンテ・フェストゥム）という2つの対照的な特性を有し、両者は独特のダイナミズムをなしている。このうち、ポスト・フェストゥム（「祭りのあと」）は、木村（1982）がその病理的な形態として鬱病を対応づけた既定性優位の〈時間〉であり、未来を、「過去からのつつがない延長」、「計画され予定された時間」として確保しようとする傾向性をもつ。他方、アンテ・フェストゥム（「祭りのまえ」）は、木村（1982）がその病理的な形態として統合失調症を対応づけた未定性優位の〈時間〉であり、未来を、「圧倒的に未知なるもの」、「これまでとは隔絶された新奇で可能性に満ちた時間」として展望しようとする傾向性をもつ。

この両者は、たしかに対照的な傾向性である。しかし、それでも、両者が、真木（1971）の言う〈インストゥルメンタル〉（媒介・手段的）な意味での時間を問題にしている点では、同じ土俵上での対照的ないし対立的傾向性に過ぎない。このことを十分理解する必要がある。ここで言う〈インストゥルメンタル〉とは、ポスト・フェストゥムとアンテ・フェストゥムの両極に引き裂かれつつも、これら両極が織りなすダイナミズム自体を展開させるような〈時間〉の性質であり次元である。

つまり、ポスト・フェストゥム、アンテ・フェストゥムのいずれが優位になるにせよ、そこには、何らかの目標状態を未来に想定した中で、それとの関係の中で〈時間〉を意味づけるという共通性がある。なぜなら、ポスト・フェストゥムは、未来の目標状態の実現に向けて、既定性（「過去からのつつがない延長」）を橋頭堡として着実に目標実現を達成しようする〈時間〉であり、アンテ・フェストゥムも、同じく、未来の目標状態の実現に向けて、未定性（「圧倒的に未知なるもの」）がもたらす一発逆転に期待をこめつつ目標実現を達成しようとする〈時間〉だからである。

これとは対照的に、ポスト・フェストゥムやアンテ・フェストゥムとはまったく関係のないところに成りたつ〈時間〉がある。すなわち、この現在を、一切の媒介・手段的な枠組みから解き放ち、ポスト・フェストゥムとアンテ・フェストゥムの両極が形づくる関係性それ自体を土台から突き崩してしまうような、まったく別箇の〈時間〉のあり方がありうる。それが、木村（1982）の言うイントラ・フェストゥム（祭りのさなか）であり、真木（1971, 2003）の用語系では、〈インストゥルメンタル〉と対置した〈コンサマトリー〉な〈時間〉である。「今ここにある、ひとつひとつの関係や、ひとつひとつの瞬間が、いかなるものの仮象でもなく、過渡でもなく、手段でもなく、前史でもなく、ひとつの永劫におきかえ不可能な現実として、かぎりない意味の彩りを帯び」（真木, 2003, p.211）て、それ自体として直接・享受されるべき対象としてあらわれるような〈時間〉の

ありよう、それが〈コンサマトリー〉である。

２．前のめりの「待つ」／徴候過敏の「待つ」

以上を前提にすると、鷲田（2006）が〈待つ〉の崩壊 ― 言いかえれば〈待つ〉ではない ― と位置づけている状態とは、時間が〈インストゥルメンタル〉な次元のみで支配され、その中で適正な〈待つ〉が奪われている状態のことだと直ちに理解することができる。加えて、〈インストゥルメンタル〉の支配下での〈待つ〉の破綻には、〈インストゥルメンタル〉な時間が保持する2つの対照的な傾向性 ― ポスト・フェストゥムとアンテ・フェストゥム ― に応じて、次の2つのタイプがあると主張されていることも容易に理解できる。

2.1「前のめり」 ― ポスト・フェストゥム

第1のタイプは、ポスト・フェストゥムが支配的な条件下で〈待つ〉が破綻するパターンである。企業のさまざまな活動や業務にまつわる言葉の多くに、ある共通の接頭辞がつけられていることに気づいたというくだりが鷲田（2006）に登場する。その接頭辞とは「プロ」（前へ、前に）である。たしかに、プロジェクト、プログレス、プログラム、プロモーションなど、類例は枚挙に暇がない。しかし、こうした「前のめりの姿勢はだから、じつのところ、何も待っていない。未来と見えるものは現在という場所で想像された未来でしかない」（p.18）。

これは、まさに、未来を「過去からのつつがない延長」、「計画され予定された時間」として確保しようとする傾向性、つまり、ポスト・フェストゥムに他ならない。ここで、「前のめり」を未来志向だと誤認してはならない。むしろ、将来が本来の未知なる時間として開けず、未来が過去から現在へと至る経緯の中にすでに完全に取り込まれてしまっているために、〈待つ〉が破綻している状態だと理解する必要がある。

ポスト・フェストゥムの傾向性の中で真正の〈待つ〉が失われる事例は、多くの場面で観察することができる。矢守（2009, 2018）で指摘したことだが、本誌「災害と共生」と関連の深い防災・減災、復旧・復興の分野では、特に多くの事例を見いだすことができる。それは、こうした領域における人間・社会の営みのキーノートが不確実性の馴致ということにあるからである。不確実な未来（将来起こるかもしれない災害）を何とか飼い馴らし、それを馴致しようとするポスト・フェストゥムな傾向性が、防災計画、対応マニュアル、事前復興プランといった、未来の「先どり」の構えとなって現れる。言いかえれば、人びとは将来の災害、未来の復興の不確実性を待ちきれずに、それを今この時点に確保しようとするのである。言うまでもなく、こうした「先どり」には光も陰もあるが、この点については、矢守（2009, 2018）で詳しく論じたので、ここでは触れない。

鷲田（2006）は、臨床の現場にも、ポスト・フェストゥムによる〈待つ〉の失調を示す事例を見いだしている。たとえば、本来、クライアントが言葉を紡ぎ出すのを待つことを本義とすべきカウンセリングの場では、カウンセラーの側が「言葉を迎えにゆくのが〈聴く〉ことの最悪のかたち」(p.70) である。なぜなら、そこでは、「語る者がみずからの鬱ぎから距離をとるそのチャンスが、聴く者によって横取りされた」（p.71）からである。「聴く者はつねに待機していなければならないのに、ついに待ちきれなかった」（p.71）というわけだ。

2.2「徴候過敏」 ― アンテ・フェストゥム

第2のタイプは、アンテ・フェストゥムが支配的な条件下で〈待つ〉が破綻するパターンである。アンテ・フェストゥムについて、鷲田（2006）は、木村敏（木村, 1982）と並んで、日本における精神医学を牽引してきた中井久夫（中井, 2003）の用語系に依拠してこの点について説明している。中井（2003）の言う「見越し方式」、すなわち、「もっとも遠くもっとも沓かな徴候をもっとも強烈に感じ、あたかもその事態が現前するごとく恐怖し憧憬する」（鷲田, 2006, p.30）ような心性が、アンテ・フェストゥムの根幹にある。鷲田は、これを「草原に佇む鹿がぴくぴくっと耳を震わせるときの、あの警戒心に近い」（p.30）と描写している。

これは、ポスト・フェストゥムと同じ種類の未来の「先どり」、「前のめり」現象ではない。両者の見た目は似ていても、根底にある〈時間〉の構えがまるで正反対である。木村（1982）が、ポスト・フェストゥムとアンテ・フェストゥムそれぞれの病理的な形態として、鬱病と統合失調症を位置づけていたことを思いだそう。ポスト・フェストゥムでは、未来を待ちきれず、律儀に生真面目に計画的に未来を現在へと囲い込む形で未来が「先どり」されている。言ってみれば、未来に現在や過去がすでに浸潤してしまっている。

それに対して、アンテ・フェストゥムでは、未来の方がすでに現在にやって来てしまっていると言える。沓かな徴候がすでに「現前」しているとはそう

いうことである。ぴくぴくっとする草原の鹿においては、「瞬間ごとに事態の変化に過度に正確に感応してしまうので、過去のメモリーがうまく活かされず」（p.31）、何かを待つための「あそびという間を欠落させた現象世界」（p.31）が生じることによって、〈待つ〉が損なわれている。これが、アンテ・フェストゥムによる〈待つ〉の破綻である。

もっとも、鷲田も、「〈待つ〉というのもたしかに『徴候』による生の全面支配ではないにしても、『徴候』への期待はある。淡い期待であることもあれば、じりじり焦げるような期待でもありうる」（p.32）と、真正の〈待つ〉が、中井が指摘する「徴候」への過敏な反応とまったく無縁ではないことは認める。しかし、徴候を前にした期待への呻吟は、「ついに『踏み越える』というのではなく、あくまで『葛藤の中で踏むこたえる』ものである」（pp.32-33）とも指摘する。ここで、「踏み越える」と形容されているのは、アンテ・フェストゥム的な徴候過敏が、現在化された未来（その徴候）が実際に「現前」する中で右往左往してしまう態勢のことであり、そこでは〈待つ〉が崩壊していると見なければならない。

アンテ・フェストゥムの傾向性の中で真正な〈待つ〉が失われる事例も、防災・減災、復旧・復興の分野に多数見いだすことができる（矢守, 2009）。端的な例は、災害に伴う「世直し」論である。「世直し」論とは、被災によって、あるいは被災を契機として、社会の総体がラディカルに変化するかもしれないと待望する思想のことである。実際、被災地には、それまでの社会の推移のなめらか延長線上には期待しづらい、過去の経緯からは大きく逸脱した（より望ましい）未来が実現しそうな兆し、つまり「徴候」が生じることが多い。この徴候に賭ける態度、つまり、「何か大きな変化が起こりそうな気がする、いや、もう半ば現実に起こっている」という予感は、被災前にも、文字通り、予感として生じうるが、言うまでもなく、災害が起こってしまった後の方が全面的に開花しやすい。

阪神・淡路大震災、東日本大震災の（直）後、「これで日本社会が（大きく）変わる」という感覚をもった経験、その杳かな「徴候」でしかなかった出来事に ― 今から思えば ― 過剰に期待して右往左往した経験に思いあたる人は少なくないはずだ。そして、その感応が、 ― 今から思えば ― 十分な熟成を待つことのないフライングだったかもしれない（逆に言えば、「結局、ほとんど何も変わらなかった」）と落胆している方も少なくないはずだ。ここで大切なのは、感応した徴候の「中身」ではない。一例をあげれば、「これで、日本にも『草の根ボランティア』がようやく根づく」と「これで、日本も『一元的な危機管理システムの構築』へ一歩を踏み出せる」は、「中身」としては正反対に近い内容をもっている。しかし、杳かな「徴候」に対してアンテ・フェストゥムをベースにした強い社会的リアクションが生じた点、それらが〈待つ〉の失調であったと位置づけうる点では両者はまったく共通している。

３．〈待つ〉 ―「待たずに待つ」という矛盾

真正の〈待つ〉は矛盾を内包している。「何かを待つということのなかには、こういう矛盾がある」（p.33）。「待つことの甲斐のなさ、それを忘れたところでひとははじめて待つことができる」（p.16）、「〈待つ〉ことにはだから、『忘却』が内包されていなければならない」（p.16）、「待つことの放棄が〈待つ〉の最後のかたちである」（p.19）、「何ごとかを待つということの拒否であるところの期待」（p.34）、「待たずに待つ」（p.55）、「〈待つ〉以前の〈待つ〉」（p.56）。鷲田（2006）が何度も繰り返す類似のフレーズは、〈待つ〉が矛盾を抱えていること、より限定するなら、自己否定の構造 ― 待つことは待たないことであり、待たないことが待つことである ― をもっていることを指摘している。

これらのフレーズには、たしかに〈待つ〉の根幹が表現されてはいる。しかし、こうした詩的な表現・描写には限界もある。それを意識してだろうか、鷲田（2006）は、本当の〈待つ〉に関する考察を深化させるために、宮本武蔵と佐々木小次郎による巌流島の決闘、太宰治の「走れメロス」などを引きつつ、「待つ（身）／待たせる（身）」という新しい観点を導入して、議論の精緻化を図っている。

そこから引き出される結論は、特定の具体的な対象（1節の用語を使えば、未来に設定された目標状態）を「目的語」として明示的に指示しつつ当事者がそうと意識してなす待つ行為は、〈待つ〉にはなりえない、というものである。「だれかの、あるいはなにかの、訪れを待つのではない〈待つ〉。そういう、未来における何ごとかへの期待ではないような〈待つ〉というもの」（p.44）こそが重要だという論点である。このような〈待つ〉にこそ、ポスト・フェストゥムに支配された「前のめり」の待つ、および、アンテ・フェストゥムに支配された「徴候過敏」の待つ、この双方を克服する萌芽があるというわけだ。

まず、前者の「前のめり」の待つ（すなわちポスト・フェストゥムが支配する待つ）とその克服の方途から見ていこう。鷲田（2006）は、育児の場面を例示に使っている。「ひょっとしたら、『育児』というのはそういういとなみなのかもしれない。ひたすら待たずに待つこと、待っているということも忘れて待つこと、いつかわかってくれるということも願わずに待つこと」（p.55）。「ひょっとしたら」という言いまわしに、逆に、現代の育児から真正の〈待つ〉が奪われつつあることに対する危機感が表明されている。実際、「早期教育の重要性」の旗印のもと、「×歳になったんだから、これくらいはできてほしい」など、「待たない、待てない」現実は深刻の度合いを深めている。次々に性急に目標実現を求めて褒めそやすが、いったん挫折すると手のひらを返したように「この子はもう見込がない」と烙印をおす社会―。

この「前のめり」の状態に欠落しているものこそ、待っているということも忘れて待つこと、つまり、真正の〈待つ〉である。「いついつまでにこれを」といったポスト・フェストゥムを基盤とした計画や目標志向の態勢をそぎ落とした上で、しかし、それでも待っていること、それがここで強調されている〈待つ〉の神髄である。同じことを、待ってもらっている側（育児のケースでは、子どもの側）から言えば、こうだ。「家族というものがときに身を無防備にさらしたまま寄りかかれる存在であるとしたら、この期待というもののかけらすらなくなってもそれでもじぶんが待たれている（待ってもらっている；引用者挿入）という感覚に根を張っているからかもしれない」（p.55）。

次に後者、「徴候過敏」の待つ（すなわちアンテ・フェストゥムが支配する待つ）とその克服の方途について見ておこう。佐々木小次郎の敗因がそうであったように、ずるずると待たされるなかで、「待つことじたいへの意識が、意識の全面を覆うようになる。いいかえると、意識が〈待つ〉というただ一点に収斂し、それにがんじがらめになってしまう。〈待つ〉が〈待つ〉こととして純化してゆき、〈待つ〉こと以外考えられなくなる」（p.45）。同じことを待たせた側、つまり、宮本武蔵の側から表現すれば、「待たせるとは相手を待つという様態に追い込み、そこで自壊させること」となる。小次郎は、待ちきれず、「意識に過重に負荷をかけられ…、まわりのありとあらゆるものが、じぶんが待つものの徴候か記号のように思われてきて、小さな物音にも躯がびくついてしまう」（pp.45-46）。こうして小次郎は敗れたのである。

それに対して、武蔵はどうだったのか。武蔵は、待たせることで勝ったわけだが、それは裏を返せば武蔵は待たされなかったということ、つまり、待たなかったということだ。では、それは、いかにして実現したか。眠ることを通してである。「約束の時刻になってようやっと眼が醒めたとき、すでに勝負は決していた」（p.47）。こうして、武蔵は、アンテ・フェストゥムに陥ることなく、「待たずに待つ」こと、つまり〈待つ〉ことに成功した。

４．「時を細かく刻んで」―真に〈待つ〉ために

武蔵は、眠ることによって、待ち損ねる危機、とりわけ、アンテ・フェストゥム的に待つことによって自壊する危機からわが身を守ったわけだが、常にこのような方略を頼りするわけにもいかない。真に〈待つ〉ことを実現するために、鷲田（2006）が示唆している注目すべき道筋が「時を細かく刻んで」という態度である。この点について最初に紹介される事例が、フランクル（1982）がナチスの強制収容所でとった方法である。収容所では、もちろん、みなが解放の日を待っている。しかし、その期待は何度も裏切られる。その絶望を、次の食がどのようなものか、次にやってくる小さな幸運・不運はどのようなものかなど、あえて、そうした目先の「無数の小さな問題にかかずらって」（鷲田, 2006, p.23）しのぐという方法である。

同じことは、鷲田（2006）で、おそらく自分を棄てようとしている息子を気にかける母親の姿勢として、次のようにも表現されている。「母親は仕方なく待つ。待つよりしようがないと思う。何を？　彼がいつか戻ってくることを、だろうか。たぶんそうではない。…（中略）…が、この待つ姿、じぶんが待たれているということを、息子は煩わしがったのだろう。だから待ってはいけない。待つのではなく、待機していること。いつも通り同じことを同じようにやっていること。…（中略）…だから、じぶんが待っているということ、そのことをまず自分が忘れなければならない。自壊を拒む方法はそれしかない。待つことを忘れ、『時を細かく刻んで』、小さな小さなことにかまけなければならない」（p.62）。

しかし、以上の例示だけに頼ると、〈待つ〉ことのやるせなさや、時を刻んで、待つことなしに待つことの痛々しさばかりを強調することになりかねない。〈待つ〉には、より前向きなポテンシャルもあ

る。たとえば、「共生」について論じた川本 (2008) は、詩人石原吉郎と宮澤賢治の作品を引いて、「共生」つまり多くの人びととともに幸せに生きていくことのベースに、ここで取りあげている「時を細かく刻んで」とシンクロする姿勢があると指摘している。石原の言葉は「日常生活をていねいに生きよ」であり、宮澤の言葉は「今のご生活を大切にお護りください」である。宮澤の言葉はこう続く。「上のそらではなしに、しっかり、落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならないものは苦しんで生きて行きませう」。ここで、「時を細かく刻んで」生きることは、待つことから生じる自壊を抑止するための消極的なしのぎの術ではなく、幸福な共生を招き寄せるための積極的な姿勢として定位されている。

鷲田 (2006) は、心理臨床家霜山徳爾の現場にも、「時を細かく刻んで」の積極的価値を見いだす。霜山もまた、上で母親の言葉として登場した「待機性」を重視する。この待機ということについては、特に、ケアや教育の場面で、しばしば「それはとどのつまり責任回避ではないのか、ただの『放置』とどうちがうのか」といった批判が浴びせられるらしい。しかし、霜山が「待機性は何もただ無為無策で僥倖を待っているのではない」（鷲田, 2006, p.81）と明言するように、待機することは問題含みの事態を単にそらし、かわし、はては見て見ぬふりを決め込むこととは異なる。

むしろ、正反対である。「時を細かく刻んで」待機する中で、心ある臨床家が実際にしていることは、看護師西川勝が言うところの「場を整えるための小さな行為の積み重ね」（鷲田, 2006, p.121）である。「そのように普通のことを淡々と反復するなかで、気がつけばケアがしずしずと成立しだしている……。その場のだれかに帰せられるということもない、この窯変のような出来事」（鷲田, 2006, p.122）こそが、「時を細かく刻んで」〈待つ〉ことの本質である。これは単なる僥倖頼み、運任せではない。かと言って、特定の誰かの主体的な働きかけに帰属されるわけでもない。この様相に、近年論壇の注目を集めた「中動態」に関する考察、とりわけ、ケアの現場に対するインプリケーション（國分, 2017）の核心を見ることもできるかもしれない。

５．〈コンサマトリー〉な時間の中で〈待つ〉

5.1〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉の弁証法

これまで論じてきたことは、要約すれば、第 1 に、アンテ・フェストゥムの方向にせよ、ポスト・フェストゥムの方向にせよ、現在を〈インストゥルメンタル〉な次元、すなわち、未来に設定された何らかの目標に対する媒介・手段的価値という視角からのみ見ている限り、待つことは自壊していく危険に常に曝されていること、であった。そして、第 2 に、そうした自壊を抑止するための鍵は、「日常生活をていねいに生きよ」、「今のご生活を大切にお護りください」といったフレーズに認められるように、現在の〈コンサマトリー〉な次元、すなわち、それ自体として直接・享受されるべき対象としてあらわれるような現在のありようを見直すことにあること、であった。

念のためにだめを押しておけば、「『〜を待つ』という精神の様態が〈時〉の流れの中で現在からその外へと超え出るなかでなりたつとすれば、何かを待つのではない〈待つ〉は、（現在の外ではなく）およそ〈時〉というものの外でなされるかしかない」（p.125）と鷲田（2006）が述べるとき、「〈時〉の流れの中で現在からその外へと超え出る」とは、目的語を伴った待つことの実態は、現在が〈インストゥルメンタル〉な意味に支配されているということである。他方、「およそ〈時〉というものの外で」とは、〈インストゥルメンタル〉の次元そのものから脱却して、〈コンサマトリー〉な時間の中で〈待つ〉ということである。

ただし、ここで、前者〈インストゥルメンタル〉と後者〈コンサマトリー〉が、相互にまったく無関連であるとか、相互に背反的な対立物だとか、そのような単純な理解がなされているわけではない点をしっかりおさえておく必要がある。前者がもたらす袋小路からの脱出口が、後者の中に見いだせるかもしれないという指摘は、むしろ、両者が密接に関連していること、より特定すれば、相互補完的な関係にあることを示唆している。実際、この点、すなわち、〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉の両者が、一見対立的に見えながらも、実際には相互強化しあう弁証法的な関係にあることについては、すでに矢守（2018）で論じたところである。

5.2 無限大の機能連関／無限小の機能連関

ここで強調しておくべきは、弁証法的な関係自体に見られるタイプの違いである。すなわち、矢守（2018）で注目したのは、〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉が、一方の「突き詰め・極限化」が他方（の否定ではなくて）の強化へと転回し

ていくタイプの機能連関であった。具体的に言えば、何らかの目標状態を徹底的に〈インストゥルメンタル〉な意味で突きつめようとすると、その突きつめの過程で、逆説的にも、この現在が単なる媒介・手段的な意味にとどまらず、たとえば、イントラ・フェストゥムの現れとしても位置づけうる「フロー体験」に見られるように、それ自体の高揚化・絶対化をもらし、〈コンサマトリー〉の次元でも充実することがありうる。このようなタイプの連関性に注目したのであった。無限大に拡大した〈インストゥルメンタル〉は、無限大に拡大した〈コンサマトリー〉へと通底しうるというわけである。

他方で、ここで「時を細かく刻んで」という態勢をめぐって生じている両者の連関は、これとはきわめて対照的であり、無限大に対して無限小の連関、極度に対して零度の連関とでも呼びたくなるタイプのものである。すなわち、〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉が、それぞれの強度を爆発的に上昇させるのではなく、まったく反対に、双方が零度へと深く沈潜する中で、両次元の間の差異や対立が無問題化し、両者が共存し同一化するような境地での相互連関である。

たとえば、4 節で触れた母親は、「待つことにまつわるすべてを消去し…（中略）…気を余所へやる…（中略）…（息子の）思い出を喚起しそうなすべての物を廃棄…（中略）…どんな些細な変化の徴候をも予兆とは受けとめない…（中略）…来る日も来る日も同じように反復する」(p.86)。しかし、それでも、母親は息子をたしかに待っている。同じく 4 節で紹介したケアの専門家も、「普通のことを淡々と反復する」。しかし、それでも、患者やクライアントの回復をたしかに待っている。ここにその可能性が示唆されているのは、〈コンサマトリー〉な現在をていねいに反復することが、〈インストゥルメンタル〉な機能を静かに回復させていくタイプの機能連関である。

災害復興をめぐって、宮本（2015）が指摘している「めざす」かかわりと「すごす」かかわりの関係性、両者の間のさらに複合的な関係性 ―「すごすことをめざす」あるいは「めざすことをすごす」― についても、今ここで論じているように、〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉との間に認められる関連性の観点に立つことで、より明確な概念的位置づけとそれを踏まえた創造的な実践とが可能となると思われる。すなわち、「めざす」と「すごす」が相補的に機能すると論じられるとき、あるいは、「めざす」ことを暫時棚上げし「すごす」ことが ― 「めざす」ためにも ― 大切だと主張されるとき、そこで前提にされているのは、〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉との間の熱く沸騰した機能連関ではなく、本稿で論じてきた静かに沈潜した機能連関であろう。

６．「開け」ていること

待つことを主題としたエピソードは、上述した「巌流島の決闘」や「走れメロス」をはじめ少なくないが、その最右翼は、ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』であろう。いつまでたっても現れないゴドー、そのゴドーを待ち続けるウラジーミルとエストラゴンの姿を通して問われているのは、次の二つの問題だと鷲田（2006）は結論づける。「ひとつは、未来にあるなんらかの目的に向けてのプロセスとして位置づけられる以外に、現在の行為を意味づける算段はありえないのかという問題であり、さらに遡って、いまひとつは、そもそもそのつどの行為に意味を求めることじたいを放棄するような生き方はありえないのかという問題である」(pp.182-183)。

この問題提起は、言うまでもなく、現在の意味は〈インストルメンタル〉な次元からのみ与えられるしかないのか、それ以外のありようはないのかと問いかけているのに等しい。この問題は、また、本論考でも再三引用した真木悠介（真木, 1971, 2003）はじめ、時間について思索をめぐらせてきた多くの論者が幾度となく、また形を変えて問い返してきた実存的な課題でもある。

〈待つ〉は、この本質的な問いかけに対する一つの回答である。〈インストゥルメンタル〉な意味づけから現在を解放することはできるのか。この問いかけに、鷲田（2006）は「できる」と答える。その鍵が〈待つ〉であり、その論理的な構造を問うてみれば、その根底には〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉との間の逆説的な機能連関がある。しかも、その連関は、矢守（2018）が注目した〈インストゥルメンタル〉の拡大・膨張の徹底によって、現在を高揚化・絶対化させることで〈コンサマトリー〉へと転回させる機能連関ではない。それとは正反対に、〈インストゥルメンタル〉の縮小・退縮の徹底によって、現在を冷却化・静謐化させることで〈コンサマトリー〉へと転回させる新しい機能連関である。

この機能連関が新たに開拓する境地として、鷲田（2006）が想定しているのが「開け」である。「何かの到来を待つといういとなみは、結局、待つ者が

待つことそのことを放棄したところからしかはじまらない。待つことを放棄することがそれでも待つことにつながるのは、そこに未知の事態へのなんらかの開けがあるからである」（p.185）。「開け」とは、迎い入れる用意があること、何が到来するのか不明なままに、いや、到来しているという事実にすら気づかないままにその何かを受け入れる用意がある状態、つまり、〈ホスピタリティ〉だと言われる。これまでに迎え入れてこなかった特定の対象を新たに包摂することではなく、不特定の、非特定の何かを包摂する用意が常にある状態が「開け」だと主張されているのだから、「開け」は、昨今耳目を集めている「インクルーシヴ」の本質を表現する概念としてもふさわしいだろう。

要するに、鷲田（2006）が提起する「開け」は、― デリケートな違いではあるが ― 何かの「徴候」に過敏に反応する状態（アンテ・フェストゥム）とはまったく異なる。また、その何かを計画として予め現在の中に取り込もうとする態度（ポスト・フェストゥム）ともまったく異なる。むろん、未来とも過去とも連絡を断って、現在へと享楽的に没入する姿勢 ― 先述の通り、木村（1982）ならば、これをイントラ・フェストゥム（祭りのさなか）と呼ぶだろう ― とも異なる。現在をていねいに静かに生きることから生れる「零度の抒情」（鷲田, 2006, p.83）の中で、到来するかもしれない何かに「前のめり」になるわけでもなく、その徴候に過敏に反応するわけでもなく、それに対して穏やかに「開け」ていること ― それが、〈待つ〉である。

参考文献

フランクル, V. E. 霜山徳爾（訳）（1985）. 夜と霧 ― ドイツ強制収容所の体験記録　みすず書房
川本隆史（2008）. 哲学塾 ― 共生から　岩波書店
木村敏（1982）. 時間と自己　中央公論社
國分功一郎（2017）. 中動態の世界 ― 意志と責任の考古学 ―　医学書院
真木悠介（1971）. 人間解放の理論のために　筑摩書房
真木悠介（2003）. 時間の比較社会学　岩波書店
宮本匠（2015）. 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり：東日本大震災の復興曲線インタビューから　質的心理学研究, 14, 6-18.
中井久夫（2003）. 新版 分裂病と人類　東京大学出版会
鷲田清一（2006）.「待つ」ということ　角川書店
矢守克也（2009）. 防災の〈時間〉論. 矢守克也　防災人間科学　東京大学出版会　pp.37-101.
矢守克也（2018）. アクションリサーチの〈時間〉. 矢守克也　アクションリサーチ・イン・アクション：共同当事者・時間・データ　新曜社　pp.75-96.